

海外での編集作業

——池上寛編『アジアの航空貨物輸送と空港』

アジア選書No.44、アジア経済研究所、2017年1月——



池上 寛

●はじめに

2017年1月に出版した『アジアの航空貨物輸送と空港』は、国際物流に関してアジア経済研究所で出版された3冊目の本である。この研究会の成果の一端はこの本だけではなく、『アジア研ワールド・トレンド』252号（2016年10月号）でも明らかにしている。

実は、この本の編集は編著者である筆者が2016年3月から2年間の予定で台北に滞在しているため、海外で編集作業をして出版したものである。海外での編集作業は便利になったと感ずることが多かった。本稿では、海外での編集作業を中心にまとめた。

●本書の目的と概要

ヒトと同じように、モノが国境を越える場合、陸海空のいずれかの方法で輸送されて越えることになる。そのなかでも、近年航空による貨物輸送が大きく増加している。ただ、航空機による一度の輸送量は船に比べると非常に小さい。また、航空輸送は最も速く輸送できる一方、そのコストもほかの輸送手段に比べて格段に高いのが現状である。

国際航空運送協会（International Air Transport Association：IATA）に加盟する航空会社が提出するデータによれば、2015年における航空貨物輸送量全体は1805億2000万トンキロメートルであった。そのうち、アジア地域が関係する輸送量は1084億8000万トンキロメートルである。全体に占める割合は60.1%であり、このことからわかるようにアジア地域を中心に航空貨物輸送が展開されているとみてよいであろう。

その結果、国際航空貨物輸送の基点である空港もアジアの6空港が上位10空港にランクインしている。国際航空貨物はアジア地域を中心に展開されているのである。

このような状況にかんがみ、アジア諸国・地域の航空貨物輸送についての研究会を立ち上げ、その成果を本書にまとめたのである。これまで日本における航空産業などについて書かれた書籍では、航空貨物輸送は

日本以外のアジア諸国・地域についてはほとんど明らかにされていなかった。そのため、本書では国際航空貨物取扱い上位10空港を有する日本、中国、香港、韓国、台湾、シンガポールの航空貨物輸送についてとりまとめた。また、これらの各国・地域の動きだけではなく、単一航空市場へつき進むASEANの動きと欧米系インテグレーターのアジアにおける動向も取り上げた。

●出版時期の決定

研究所内の担当部署に最終成果の原稿を最初に提出したのは、2016年2月であった。その後、査読者からの修正要求やコメントなどを修正原稿に反映させ、最終的に出版が決まったのは7月末のことであった。出版の連絡があつてすぐ編集担当者に連絡し、2017年1月20日頃の出版を目指し、通常よりも緩やかなスケジュールを組むことにした。

それにはいくつかの理由があつた。一つは、海外で編集作業をしなければならず、通常より最終成果の原稿を出版用原稿にするのに時間がかかると考えたためである。また、10月中旬と春節（旧正月）に一時帰国の予定があつたため、それにあわせて研究所に行き、10月中旬には初校ゲラの受け取り、旧正月には出版された本の発送作業ができるようにする必要があつた。

また、編集担当者に出版用原稿を渡す際に、各執筆者にエッセイを書いてもらうこととしたため、出版用原稿の提出が少し遅れるかもしれないと考えた。さらに、最終成果の原稿から出版用原稿への修正作業、『アジア研ワールド・トレンド』の原稿執筆とその校正時期が重なつたため、執筆者にこれ以上の負担をかけるわけにはいかなかったことも理由としてあげられる。いずれにしても、通常は編集担当者に出版用原稿を提出してから3カ月程度で出版するスケジュールを約1カ月程度延ばす形で編集作業を始めた。

●海外での編集作業

海外で編集作業をすることになり、できるだけ効率的に作業を進めることを考えた。そのため、出版用原稿にするための編集作業では、まず参考文献の整理から始めた。当然本文などもチェックしなければならないが、参考文献は同じ文献が複数の章で使われていることもあり、また本文よりも表記の統一がしやすいこともあってこの作業から開始した。不明な部分は執筆者に聞いて対応するとともに、ほぼ同じ頃に出版用原稿にするために各章の本文表現や図表のチェックを始めた。

執筆者と参考文献や本文についてのやりとりを終え、こちらも問題がないと判断した原稿から五月雨式に編集担当者にファイルの送付を始めた。これがだいたい9月上旬のことであった。その後、編集担当者のチェックを受けてコメントや確認が入ったものについては、執筆者に確認をとるなどの作業を行った。一度で確認が済む場合もあれば、メールのやり取りでは確認が取れにくい場合には、直接電話をして確認することもした。そして、まえがき、すべての章の本文（図表含む）とコラムのチェックが終わり、印刷業者へ入稿したのが9月末であった。

次の作業としては、印刷業者から届く校正ゲラへの対応である。まず初校ゲラ校正については、ゲラ原本（初校）は一時帰国しているときに研究所に行って受け取った。それ以外の二校、三校はすべてメールで受け取った。今はメールの添付ファイルで受け取れるので、非常にやりやすくなった。

初校校正の際には、ゲラ原本は台湾に持って帰って修正し、修正したゲラは国際スピード郵便（EMS）で編集担当者に送り返した。台湾からEMSで書類を送付する場合、受付時間帯次第では2日後には日本に届くようである。しかし、この時は全部のゲラを送り返したので、書類扱いにならなかったのか通関に時間がかかって結局編集担当者が受け取ったのは4日後であった。台湾から日本は地理的にも近いので、この程度で済んだわけだが、地理的により遠い国から送付していたら、受け取りまでの日数はもっとかかっていたことであろう。

各章のゲラチェックは、二校は11月中旬に、同月末には三校が届いた。希望する執筆者にはファイルを送付して最後の確認をもらいつつ、編集担当者から

出た疑問についての確認作業を行った。12月10日に原稿の確認作業はほぼ終了し、同月中旬に最後のチェックを行い、印刷原稿を確定させた。

最後は、索引の作成作業である。索引は初校ゲラを編集担当者に送った直後からリスト作りに取り掛かった。まずこちらで2つに区分した索引リスト候補案を作成した。一つは必ず索引に載せる項目、もう一つはページ数の関係で削除するかもしれない項目である。索引候補のリストは二校ゲラが届く直前に執筆者に送付し、追加や削除の作業をしてもらった。三校ゲラのチェックが終了した直後に、掲載する索引項目を確定させてページ番号をつける作業を行い、すべての原稿が印刷できる状況になったのは年末であった。年明けから印刷が始まり、1月18日に印刷が完了して出版となった。

●通信環境の改善と便利な中の危うさ

海外での編集作業はメールでやりとりできるようになり随分楽になった。これには、通信環境の改善もある。15年前に赴任してきたとき、自宅でのメールのやり取りは電話回線であったため、大きなサイズのファイルを受け取るにはかなり時間がかかった。しかし、台湾でも通信環境は大きく改善し、受入機関でも自宅でも簡単にファイルのやり取りができる。その意味では、海外にいても、国内と同じように編集作業ができるようになったのは大きな変化であろう。

しかし、こちらから間違いなくファイルを送付していても、相手側のサーバーの問題で受け取ってもらえないことがあった。こちら側は、連絡がないな、あるいは返事が遅いな、という程度であったが、相手方にすればいつになったらファイルが届くのか、かなり不安であったに違いない。実際、問い合わせがあつてから受け取っていないことを知った。添付したファイルのサイズが大きすぎたことが理由のようであるが、原因ははっきりしない。少し余裕を持って作業を進めていたので大きな問題にはならなかったが、厳しいスケジュールで作業を進めていたら、大変なことになるかもしれない。便利になった分、危うさもあることを思い知らされた。より慎重に確認作業をしなければならないのが、海外での編集作業なのかもしれない。（いけがみ ひろし／アジア経済研究所 在台北海外調査員）